祖母の死

胡桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祖母の死

【Ｎコード】
Ｎ９９２１Ｖ

【作者名】
胡桃

【あらすじ】
わたしの中学生のころの記憶と今の感情を織り込んだものを文章に表わしてみました。
人はいつか必ず大切なものを失うのだということ。そして、それを乗り越えていかなければ、生きていけないのだということ。
誰しもがかかえる心の葛藤だと思います。ときどき、そのことを思い出し、あなたの大切な人を大切にしてあげてください。

中学生のころ、優しかった祖母が死んだ。
物心ついて、一番身近で最初の死だった。
祖母の死は母の母の死でもある。
想像したら、胸が押しつぶされるような感覚だった。
今のわたしなら母を失う怖ろしさが、少しの想像で分かる。
それなのに、あのころのわたしはその欠片ばかりの想像力さえなく、身勝手な嫉妬を祖母に対し抱いていたのである。
わたしは、その頃の思いをはけ口として読書感想文に残した。
我ながらよい文章が書けたと思った。
しばらくはその感想文を両親が読んだことを知っても、なんとも思わなかった。正直者は何をしても許されると思いあがっていたからなのだろうか。あのころのわたしは今以上に鈍く、何も考えていなかったように思う。
今は、あのころのわたしを責めることなく、ただ黙って受け入れてくれた母に感謝している。わたしなら、自分の娘がそんな風に思っていたらどうしただろう。母のように、許し、受け止めることが出来ただろうか。
母は、母の死を受け止めた――少なくとも表面上は受け止めたかのように見える。しかし、ふと母が母の思い出を振り返ったとき、母は静かに涙を流す。わたしはそんなとき、母の時間はやはりあのころで止まってしまっているのではないだろうかという不安にかられるのだ。
どういった種類の不安か、それは母の時間を心配しているわけではないのだと気付かされる。自分がもし、母と同じように母を失ったとき、母と同じように永遠にあの時が止まったまま生きていかなくてはならないのではないだろうか、という自分本位の心配なのだ。
結局は母が大切だ、と言いながら自分のことしか考えていない。

母を失ったとき、わたしは死ぬかもしれない。だが、それは決して母を思ってだとか懐かしくだとか、そういう感情ではなく、ただ自分勝手な感情に振り回されてゆえのことなのである。

皆、こんな感情を抱えながら生きているのだろうか。大切な人を失った人はどんな気持ちで明日を生きるのだろうか。

人は自分のためだけに生きることはできないといいながら、その本質は結局のところ自分のためだということをどこか自覚しているように思う。

母は母を失った。それでも、生きている。涙を流しながら。それでも、生きているのだ。

わたしは未だに祖母の遺影をまっすぐ見つめることが出来ない。それはきっとあのころの幼いわたしを思い出すからだと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9921v/

祖母の死

2011年10月9日06時34分発行